



ベネズエラの博物館機能の 充実を図る アントニオ・アギレラ氏

●ベネズエラ国立自然科学博物館館長

Mr. Orangel Antonio Aguilera Socorro

オランヘル・アントニオ・アギレラ・ソコロ●特にカリブ海及び南米地域に生息した古生物を研究対象とする。1983年よりフランシスコ・デ・ミランダ国立大学で教鞭をとるかたわら、99年からはスミソニアン熱帯研究所（パナマ）の研究員として、南米地域で数多くの発掘フィールドワークに携わる。2006年9月より現職

「ジ」 ヤパンファウンダーシヨンの文化人招へいプログラムでは、招へいされた方自身の「見たい・聞きたい・触れたい」という熱意が最も重要な鍵になります。アギレラ氏はベネズエラ国立自然科学博物館の学術機能の強化と展示内容の拡充のために期間限定で館長職に任命され、人脈形成や交流拡大を目指しての来日となりました。2週間で7都市訪問という過密スケジュールにもかかわらず「毎日わくわくして過ごしています」と会うたびに感謝してくれた新館長は、そんな熱意に溢れた行動派研究者です。

国立科学博物館をはじめとする各訪問先では、館長との意見交換、組織・予算に関するレクチャー、展示方法の解説など、アドミニストレーターとしての使命を強く意識した内容になりましたが、専門の古生物や恐竜の話題になると、同行した（同じく研究者の）ご夫人に「この人、古生物の話になると止まらないんですよ」と何度も諭されるほど。

豊橋市自然史博物館で行なったセミナーでは、「うちの動物園には『なまけもの』がいないので、是非ベネズエラより送っていただきたい」という動物園関係者からの突飛な要望に対し、「帰ったら早速、動物園園長をやっている教える子に相談して届けさせましょう」と「現実味のある」ユーモアで応じるなど、にこやかに穏やかな人柄も強く印象に残りました。

取り組み前後の礼儀作法にも関心を寄せた大



相撲観戦、快適さと正確さに感激した新幹線乗車、豊橋市での小学生との学校給食など、日本の社会や文化までを積極的に体験されました。何よりも訪問先で培った幅広い人脈（＝名刺の山！）が一番の財産になったことでしょうか。帰国直後に届いたメールによると、早速、ベネズエラの大学や行政関係者と一緒に日本との交流の可能性を具体化すること。日本滞在中に毎日感じていた「わくわく」は、帰国した今でもそのまま続いているようです。●（片山克人）

古生物の骨格化石やレプリカなどが豊富に展示されている茨城県自然博物館を見学するアギレラ館長と夫人
撮影：高木あつ子